

817 肝全体が著明な腫大を呈した血管腫の1例

市川千宙¹⁾，山下大祐¹⁾，宇佐美悠¹⁾，井出良浩¹⁾，今井幸弘¹⁾，
瓜生原健嗣²⁾，伊藤 亨³⁾，横崎 宏⁴⁾
(神戸市立医療センター中央市民病院 臨床病理科¹⁾，同外科²⁾，同放射線診断科³⁾
神戸大学大学院医学研究科 病理学講座 病理学分野⁴⁾)

【症例】40歳代 女性

【既往歴】

ネフローゼ症候群(1981年)

全身性エリテマトーデス・Lupus 腎炎(2003年からステロイド治療開始)

【現病歴】

2008年に左側腹部痛を主訴に近医を受診し、腹腔内出血の診断で当院へ転院された。肝 S2/3 の腫瘍出血に対し塞栓療法を施行するも、完全な止血は得られなかった。左葉からポリープ状に突出していた出血部腫瘍とその基部の肝実質を切除した。2010年に右頬部皮下出血から播種性血管内凝固と診断され、保存的治療で軽快され、現在は外来フォローアップ中。

【画像所見】

肝内に多発して認められる、T2WIで高信号を呈する腫瘍性病変を指摘された。

【2008年肝部分切除標本】

肉眼的に、腫瘍表面は暗紫色の大小の隆起を認め不整で、断面では凝血容れたスポンジ状の病変を認めた。正常肝との辺縁は不整であった。

組織学的に病変では、凝血を容れた様々な大きさの腔を認め、それらの間に正常肝組織を島状に認めた。隔壁は薄い膠原線維からなり、一部に平滑筋束を認めた。内面は扁平な内皮細胞で裏打ちされていた。これらの内皮細胞は一部のみCD34陽性であった。以上から肝血管腫と考えた。

【問題点】

多発性とするか、びまん性とするか

